

場の顔

たなべ しゅん



場の顔

たな



●著者略歴●

たなべ・しゅん

本名 渡辺英俊

1933年 山梨県に生まれる。

山梨大学学芸学部国文科卒業。東京神学大学、同大学院。

Drew 大学神学部(米国)にて新約聖書学を専攻。

現在 日本キリスト教団横浜磯子教会牧師。

主要著訳書

A. リチャードソン『新約聖書神学概論』(共訳)・(1967年)

E. ケーゼマン『新約神学の起源』(1973年)

『聖書の人間たち』(1976年)

『愛への解放』(1980年)

住所 横浜市磯子区森3丁目17-7

場 の 顔

1984年10月13日 第1刷発行

定価 1700円

著 者 たなべ・しゅん

発行者 武 内 辰 郎

発行所 (株)オリジン出版センター

東京都新宿区岩戸町16 メジャー神楽坂402

電話 (03) 260-0453

振替 東京 0-44705

印 刷 産陽印刷株式会社

装 幀 伊 藤 一 廣

落丁本・乱丁本はお取り替えはおは

序にかえて

キリスト者たなべ・しゅんの書きおろした六百枚の長篇の校正紙に目を通しながら、わたしは何故三つの「場の顔」を作者がしつらえねばならなかったかという点に特に興味をいだかせられた。この三つの「場の顔」は、縁なし眼鏡、赤縁眼鏡、黒縁眼鏡によって表象されている。主人公佐伯裕は「場」の転換に応じて三つの眼鏡を意識的に掛け替え、その「場」における完璧なヒーローになり切ろうと辛苦するのである。

一、縁なし眼鏡は、佐伯が事業のために資産家の未亡人と結婚しながらもお確保しようとする小市民的しあわせの幻想とその空疎さを象徴する。二、赤縁眼鏡は、朝鮮戦争下の特需ブームと「高度成長」期にはさまれた曲がり角の時代を背景にして土地買いや企業の乗っ取りを策する佐伯の欲望や行動の表象として用いられている。三、黒縁眼鏡は、佐伯が潜在的に憧憬していた八神Vの前に立つための黒色の僧衣の役割を果たしているようにみえる。

佐伯は三つの「場」の矛盾や葛藤を自覚すればするほど、意識的な眼鏡の掛け替え操作に熟達していくこととなる。このことは一九五〇年代後半において日本の曲がり角に立たされた戦後世代の現実対応の微妙さを浮彫りしているといえるであろう。何故なら、わたしたちは、六〇年安保の洗礼を受けた二〇代が、この種の自覚にさえいたらぬまま状況に流されていく姿を見せつけられているからである。それは、現在にも通じている。つまり、三つの「場の顔」は、佐伯という現代のヒー

ローの環境に即した自己操作のやむなさとその仮面の謂にはかならぬのかも知れぬ。少なくとも、作者は、このように主人公のシチュエーションをしつらえている。かくして、現代のヒーロー、ベチヨーリンとベーラは登場する。

とはいえ佐伯の「企業」という場におけるむきだしの野望は、遂に自分の愛する秘書みね子を商戦の犠牲に供することをも辞さないという極限にまでいたるのが、みね子の告白（第三章 島崎みね子の手紙）からみてとれる。そして作者は、こういう「良心の圧殺」による破綻を「神」にたいする挑戦で回復することを佐伯にこころみさせる仕掛けを通じて、「日本人のこころ」を問い、その過程で現代の既成教会的宗教のあり方に重要な問いを投げかけるにいたるのである。それ故、この長篇は、いいかえれば「場の顔」さえ意識し得ない大方への問いを契機とし、自己と神との緊張関係をきわめて大胆に問いなおそうとした自己告発の書といえないことはない。それは、作者の感性に近いと思われる棚部T大生の洗礼前夜の感懐ともいふべき次のようなイエス・キリストにたいする「共感」からもうかがえよう。

このお方が わたしに
代って死んだゆえ……

とは何だろう……？ そんなトテツもないことを、彼らはなぜ、こんなにいい気持そうに歌うのだろう……？ （略）私はその時、奇妙な想念に捕えられていた。この会場（「クルセード夏期大聖会会場」）のどこかに、私と同じように冷えびえとした心で、この場面を見ている「この

お方」と呼ばれる人物がいる……という想念だった。

ここから出て行かないで……、自分の名を唱えるこのウソツパチ集団の中に踏み留まって……。私は「このお方」に、胸の痛くなるような共感を覚えた。とたんに、ドツと涙が溢れて来た。自分の中のもう一人の自分が、そんな私を嘲笑っていた。

(第二章 佐伯氏と私)

この部分からもみてとれるようにキリスト者たなべ・しゅんの「日本人の心の醜さ」(あとがき)の追及と、現代の聖職者の「世代的」なあり方への批判は、「己れのはらわたをさらけ出して」(同上)はじめて可能になったものに違いない。あわせて、「聖霊を受けて会社の公害たれ流しを内部告発したサラリーマンの話や、聖霊を受けて原爆製造から手を引いた科学者の話が遂に出て来ない」(第二章 佐伯氏と私)という一言は、「日本人の心の醜さ」を自己の問題として取り込み、これをえがき切ろうとした作者の素顔の告白であろう。それは、「僧にも在らず、俗にも在らず」という親鸞の述懐と、どこかで何となくかよいあっているようである。

なお、この長篇の反「世代的」な主題と「藪の中」(芥川龍之介)で用いられているものと相似の構成および筆法などについては、わたしの感想とは別にそのプラスとマイナスの剔抉されることが求められる。

一九八四年八月十五日

野間 宏

目次

序にかえて	1
第一章 佐伯氏の死	9
第二章 佐伯氏と私	35
第三章 島崎みね子の手紙	136
第四章 佐伯氏の遺録	267
エピローグ	344
あとがき	347

場の 顔

第一章 佐伯氏の死

1

あれからもう二十年余りになる。ようやく私の待つていた時が来たようだ。私が佐伯裕氏の行跡を調べて行った顛末を公けにすることは、私にとって言わば神から課せられた義務だと思い続けて来たのだが、歳月が傷を洗い癒してくれるまでは、痛々し過ぎて筆が執れなかったのだ。今やっと、その重荷を下ろすことのできる時が来たと思うと、胸が震えるのを禁じ得ない。

佐伯氏が、彼の秘書島崎（当時）みね子に対する暴行殺人未遂の容疑で指名手配され、東北の温泉宿で自殺したあの事件……と言っても、思い出してくれる人は少ないだろう。当時の新聞や週刊誌の記事は、余りに興味本位の猟奇的な扱い方をしたもののばかりなので、間もなく切り抜きを処分してしまったが、一つだけ保存してある某新聞の次のような記事を見たら、ああ、あれかと思い出してくれる人もいるかも知れない。それは、

「こわい夜の千代木公園

美人秘書襲われる」

という見出しで、次のように書いている。

「昨夜十時半ごろ、千代木公園内の脇道に駐車してあったライトバンの中に若い女性が倒れているのを、通りかかったアベックが発見して一一〇番に知らせた。この女性は、所持していた運転免許証などから、千代田区神保町S商事株式会社社長秘書M子さん（二十三歳）とわかり、首に絞められた跡があつて仮死状態になっていたが、救急車で病院に運ばれ、手当の結果一命はとりとめるもよう。発見された時M子さんは車の後部座席に仰向けに倒れており、着衣の前が鋭い刃物で切り裂かれ……（中略）……ていた。警察では本人の回復を待つて事情を聞くことにしているが、現場の状況から通りすがりの変質者の犯行と見て、目撃者捜しなどの捜査を始めている……云々。」

この記事を読んだ段階では、まだそれが佐伯氏と何らかのかかわりがあるなどとは思ひもよらなかった。だから、その夜遅く下宿に帰って夕刊を開き、

「千代木公園の暴行犯

被害者上司の社長を指名手配」

という見出しの横に佐伯氏の顔写真を発見したとき、私は自分の眼を疑った。急いで記事に目を走らせると、

「昨夜千代木公園で首を絞められて仮死状態で発見された社長秘書M子さん（二十三歳）は、今朝早く意識を回復し、病院で警察の調べに対し被害のようを供述した。それによると、M子さんは昨夜九時三〇分ごろ、勤め先の佐伯商事株式会社（千代田区神保町二一六〇）の社長佐伯裕（三十四歳）に命じられて、会社の近くで佐伯をライトバンの後部座席に乗せ、自分が運転して千代木

公園内の事件の場所まで来たとき、突然後ろから首を絞められたという。佐伯は昨夜から行方をくらましており、犯行の動機などはまだわかっていない。千代木警察署は、M子さんの告訴を受けて佐伯を全国に指名手配すると共に、同社の事務所や佐伯の自宅などを家宅捜査した……云々。」

と書いてあった。私は思わず、

「ウソだ——。」

と叫んだ。そこに報じられている「昨夜」は、八時過ぎから十一時過ぎまで、この私がずっと佐伯氏と一緒にいたのだ。彼が事件の時刻ごろ千代木公園にいられるはずがない。彼は何かの異にはめられたのだと私は思った。翌朝早く、私は千代木署にでかけた。しかしそこには、佐伯氏が湯ノ沢温泉の宿で服毒自殺したという知らせが入ったところだった。係の刑事がすでに確認に出発したと聞いて、私も上野駅に走り、奥羽本線の急行にとび乗った。

私はいたたまれない思いだった。無実のはずの彼がなぜ死んだのか——。私がそれを証明してあげられることを知っていたはずの彼がなぜ……？ 私はそこに、事件と彼とのどうしようもないつながりを感じてしまっていた。

当時、二十歳を幾つか出たばかりだった私は、佐伯氏との出会いを通して、いわゆる「ヤソ」と呼ばれる人間になっていた。しかし私の場合には、信仰を持ったというよりも、佐伯氏に魅せられていたと言った方がよい。言わば、彼は私にとって「神さま」だったのだ。ぬれ衣を着せられて苦しんでいるのなら、一緒に死んでもいい……とまで思っていた。だから、ここで自殺なんかされては困るのだった。私は犯行と同じように、自殺もまた、人違いか何かであることを願った。

雪に埋もれた温泉町の小さな寺で、私は遺体に対面させてもらった。眼鏡をはずした彼の顔は、少し印象がおだやかになっていたが、彫りの深い死顔は生前そのまま、聖者のような敬虔さを湛えていた。家族は、地元の葬儀屋に電報替為で金を送って、遺骨や遺品は当分の間寺に預かってもらってくれと言ってきたのだ……と、立会いの警官がもらしてくれた。形ばかりの読経の、短い葬式だった。

いったい何がこんなことにさせたのだろうか——。私があれほどに心酔してついて来た彼に、何があったのだろうか——。私は、よりかかっていた杖がポッキリ折れたような気持になっていた。このままでは生きられなかった。だから、何としてでも、何が原因で何が起ったのかを突き止めねばならないと思った。私は帰京したその足で、すぐわたしたちの教会の牧師を訪ねた。

牧師——。それはわたしたち信者の間では、一種の憧憬の響きを持った呼び名だ。佐伯氏と並んでその人の説教を聞くことを、私はどんなに楽しみにしていたことだろう……。いや、逆の言い方をすべきだろうか。その人の説教を聞くために、佐伯氏と並んで座ることを、私は無上の楽しみとしていたのだ。牧師というものは、教会員が死んだらまっ先に駆けつけるものです……と、説教の中でよく言っていたのを覚えている。その彼が顔も見せなかったというのは、何か深いわけがなければならぬ道理だった。佐伯氏の、何かの秘密を知っているということも、考えられなくはなかった。牧師はくったくのない笑顔で私を迎えた。大事な信者を一人失ったという顔ではなかった。

「珍しいですね……。何か困ったことでもできましたか？ ……いや、どうぞ何でも相談して下さい。迷える羊を尋ね出して救うのが、いわば私の仕事ですからね、はっはっは……。それに今

日はちょうどよかった——。いつも大事な会議があつて留守がちなのでね。今日もこれから一つあるんですが、まだ大丈夫、三十分くらいはやりくりできますよ。まあ、座って楽にして下さい。」ソファーに導きながら、牧師は愛想のいい饒舌の中で終りの時間を指定した。私の顔を見ても、用件の見当がついた様子はない。私は胸糞が悪くなって、投げつけるように切り出した。

「今、湯ノ沢温泉での、佐伯さんの葬式から帰ったところです。」それを聞くと、牧師は急にけわしい顔になった。

「いや、その……、あの人のことは教会とは無関係です。君も葬式なんかに行つてはいけなかった——。教会としては、明日の日曜にでも長老会を開いて除名にするつもりです。君もよけいなことを考えずに、こういう時こそ一生懸命に聖書の勉強をして下さい。聖書をしっかり読んでいないからああいうことになるんです。とにかく、新聞には教会関係のことがわかつていないようなので、ほっとしているところですよ。新しい人にはとんだつまずきですからね——。君も、よけいなことはしゃべらないように注意して下さい。」

そう言つて、牧師はさぐるように私の顔を見た。私はがっかりした。この人は、今度の事件で教会の評判が傷つくことしか心配していないようだった。

「先生——。僕が知りたいのは、佐伯さんがなぜ死んだのかということです。教会の聞こえなど、僕には関係ありません。」

牧師はあわてて首を振った。

「君……、そんなことを言つてはいけませんよ。教会は大勢の会員のものですから、佐伯さん一

人のために傷つけられたら困るじゃありませんか……。不信者が裁かれるのは仕方ないことです。むしろ君も、あんなふうにならないように、真剣に求めなければいけません。求め方が足りないから、道をふみはずすんです。」

「しかし——、佐伯さんはみんなから尊敬されていた立派な信者だったんじゃないですか？」

「それは、見せかけだけです。本当の信者だったら、こんな事件を起すはずがありません。良い木が悪い実をならせることはないし、悪い木が良い実をならせることはできないと、聖書にあるとおりです。わたしは前から、佐伯さんには問題があると思っていました。」

「それではなぜ、この間のクリスマス・イブ集会での『証』を佐伯さんにさせたんですか？ 素晴らしい話で、みんなが涙を流して感激したじゃありませんか……？」

「……………」

返事に詰まると、牧師は厳肅な顔を作った。

「一時は、その……、そういう時もありました。しかし……、それは本物ではなかったのです。どんなにいい体験をしていても、聖書の御言葉から離れたらだめです。あの人は、本当には、御言葉を聞いていなかった——、だから、こんなことになったのです。」

私はそれ以上議論するのをやめた。佐伯氏について、いくらかの事実でも引き出したいと、いろいろ尋ねてみたが無駄だった。彼は警戒の塊のように言を左右にして、私を佐伯氏への関心から遠ざけようとするだけだった。そして、実際、彼は佐伯氏についてほとんど知らなかったし、知ろうとしなかったというのが事実であるらしかった。それ以上そこにいる興味をなくして、私が辞去